

アクションリサーチを通して感じる 対馬の豊かな自然と課題

古茂田 香

1. はじめに

私たちは8月6日から10日にアクションリサーチのために対馬へ滞在した。本レポートでは2日目の8月7日、長崎県立対馬高等学校ユネスコスクール部の生徒たちと共に参加した上県町佐須奈地区でのツシマウラボシシジミの保護活動と、佐須奈地区でのバードウォッチング公園での講義、体験についてまとめる。

2. 対馬での活動

①ツシマウラボシシジミの保護活動@佐須奈

2日目の午前中は農林漁家民宿先から車で20分ほどのところにある佐須奈地区のツシマウラボシシジミ保護区に行き、本種の吸蜜植物であるケヤブハギの苗100株を植える活動を体験した。保護区は人工森の中にあり、ツシマウラボシシジミの吸蜜植物や食草をツシマジカの食害から守るため、2メートル近くある防護柵で囲われていて、ある程度広さも確保されたスペースだ。今回、私たちは対馬高等学校ユネスコスクール部の部員や顧問、そしてこの保護活動を支えている「もやいの会佐須奈」の方々、福岡女子大学のインターン生等総勢30名ほどでケヤブハギを植えた。本学の学生と対馬高校の高校生が3、4人で一組となり、空いているスペースにシャベルで穴を掘ってケヤブハギの苗を植え、土をかぶせて水をやる場所までが一連の流れであった。

私は高校3年生の女子生徒2人とグループになり、10本以上の苗を植えた。シャベルで穴を掘る担当だったが、3、4本植え終えたところですでに疲れていた。一方、高校生の2人は植え終わるとすぐに次のスペースを見つけては移動していて島っ子ならではの元気さを感じた。ユネスコスクール部というだけあって、こうした活動に慣れているようで作業も早い上、少し虫がいたくらいでは騒がず、「こんなのでビビっていたら対馬では生きていけない!」と話している様子を見ると、とても頼もしく感じた。また、作業中に進路の話を聞いてみると、対馬には高等教育機関がないため、2人とも島を出るという。一人の生徒は国公立の大学志望で、つい先日も壱岐での勉強合宿に参加し、大学受験に向けて勉強に励んでいると話していた。もう一人は福岡にあるブライダル専門学校に進学するつもりだという。2人に東京へ出る気はないのかと尋ねたが、2人とも都会は怖いから住むのは嫌だといい、出ても九州あたりまでがいいと言っていた。私はこの活動と会話を通して2人ともかなり対馬に愛着があるように感じた。映画もボーリング場もなく、遊ぶところは少ないが、その分外で遊んだりするといい、高校生になってもそうして友達と遊べる環境があることはうらやましいと思った。ある意味、都会の高校生よりも価値のある時間を過ごしているかもしれない。活動を終えた後は部員みんなで集まって、カメラアプリを使ってスマートフォンで写真を何枚も撮って盛り上がっていた。そうした姿を見ると彼女たちもそのへんの高校生と変わらず、可愛らしく感じた。

高校生との会話を楽しみながら作業を終えたところで、ある食草についていたツシマウラボシシジミの幼虫をみんなで観察した。幼虫は本当に小さく、米粒くらいの大きさであった。ど

うやってこんなに小さな幼虫を見つけたのだらうと疑問に思うほどである。またその後、保護区から少し斜面を降りたところにあるもう一つの保護区へ移動した。そこではついに野生のツシマウラボシシジミを観察することができた。関東でみられるシジミチョウよりも一回りほど小さく、背面はキラキラと薄い青が光っていてきれいであった。対馬に住んでいてもなかなか見られないといい、普段は対馬南部に常駐する長崎新聞の記者がわざわざ写真を撮りに来るほどだそう。それだけ数が減り、絶滅に瀕している生き物なのだと実感し、こうした保護活動は今の頭数を維持し、守っていくためには重要だと再確認した。こうした現場体験は、子供たちに現状を知ってもらい、考えるきっかけを与えるので、その重要性や意義を感じ取ることができた。

②一般社団法人 MIT 吉野元氏の講義、ビオトープでの生きもの調査@佐護

ツシマウラボシシジミの保護活動後、佐護地区のバードウォッチング公園へ移動した。公園の丘の上にある観察棟で対馬高校ユネスコスクール部の皆さんと共に昼食をとりながら、一般社団法人 MIT 代表理事の吉野元氏より佐護地区でのツシマヤマネコ保全活動についての講義を受けた。MIT は「みつけ・いかす・つなぐ」のイニシャルをとって名付けられた法人で、地域資源を活かしながら、環境保全と地域振興の両立を目指して様々な事業を展開している。

今回、具体的に「佐護ヤマネコ稲作研究会」の活動について説明があった。同研究会のメンバーは、対馬随一の米どころであり、ツシマヤマネコの高密度生息地である佐護地区で、生き物と共生する農業を目指し、環境に配慮した高付加価値の生きものブランド米「佐護ツシマヤマネコ米」を生産している。

田んぼではヤマネコがよく目撃されているが、田んぼは両生類やネズミ類等、ヤマネコの重要な餌場であり、稲で身を隠したりする休息場、仔育て場としての機能を有している。ヤマネコは、民家の鶏を襲うことがあり、ヤマネコは害獣だという人も少なくなかった。しかし、世界的に見ればヤマネコは希少な生き物であり、共生していくことは必要不可欠なことである。その共生を実践しているのが佐護ヤマネコ稲作研究会の皆さんだ。ヤマネコをはじめとする多様な生き物が暮らしやすい環境を作り、消費者に安心安全なお米を提供するため、なるべく農薬を使わない減農薬栽培が主な取り組みの一つである。そのお米がヤマネコ米として販売されており、一般的に売られているお米よりは高価格だが、そのヤマネコ米が売れることでヤマネコ保全や農家の所得向上や担い手確保に繋がっている。ヤマネコ米の生産普及活動が進むにつれ、購入者も、協力してくれる農家も増加しているという。このような環境へ配慮した取り組みが地域の人をはじめ、日本全体にも広がっていき、評価されることは持続可能な社会を作っていくには重要な一歩だと思った。多くの人に活動を知ってもらい、それに協力、参加してもらえれば、少しずつでも今あるいろいろな課題は良い方向へ進むのではないだろうか。

吉野氏の講義の後、同研究会が維持管理するビオトープにおいて生きもの調査を体験した。ビオトープは、生き物のためにつくった人工の湿地である。もともと、耕作放棄地であったところを田んぼビオトープとして再生させた。メダカやカエル、ゲンゴロウなどの小動物はもちろん、対馬には渡り鳥が多く来るため、野鳥が利用するような環境の整備も行われている。ビオトープでは、畦際、抽水植物（ヒメガマ等）の根元付近、周囲に植物や畦が無いコドラート区画の3つに分かれ、それぞれどんな生き物がいるか、また、コドラート区画では種ごとに何

匹いるのかをそれぞれ調査した。ここでも対馬高校の生徒たちと一緒に、虫網や虫かごを用いて生き物を捕まえ、観察した。

私たち大学生は水の中に裸足で入ることは躊躇していたが、高校生はほとんどみんなが入っていて、一生懸命に生き物を探しており、本当に元気で健気な子たちだと感心した。数十分後、それぞれのグループで活動を終え、みんなで集まってどんな生き物がいたかを共有し、ビオトープが多様な生きものの生息場所になっていることを認識した。ビオトープは単に造成すれば終わりではなく、定期的に土をしめ固めたり、植物を間引いたり、常に水を流しながら、水田魚道を通じて水路とのつながりを持たせる必要があるため、管理するのは簡単なことではないと思う。研究会の方々の苦労や保全にかける想いが伝わってきた。また、ビオトープでの生きもの調査は、子供たちに環境教育の一環として、生態系や環境保全について学んでもらうにも最適な場だと感じた。

③対馬野生生物保護センター

バードウォッチング公園での活動後、対馬高校の皆さんと別れ、私たちは環境省対馬野生生物保護センターへ向かった。ツシマヤマネコ保護の拠点施設であり、環境省が設置し、対馬市・長崎県・環境省の3者で管理運営している。同施設はビジターセンター機能、調査研究機能、保護収容・リハビリ飼育機能、野生生物保護行政機能を有し、1階部分のビジターセンターにはツシマヤマネコをはじめ、対馬の動植物や生息環境、現状や保全活動について解説展示されている。

ツシマヤマネコは日本で最も絶滅が危惧されている動物の一つで、私たちが訪れた当時は1頭のヤマネコが一般公開されていたが、現在は治療のため休止中であるという。このヤマネコは福岡市動物園で生まれたため、福岡の「福」と対馬の「馬」とをとって「福馬」と名付けられ、年齢は14歳である。島内で飼育されているヤマネコは他に2頭おり、この保護センターのバックヤードに「なみ」と、内山の野生順化ステーションに「ななみ」というヤマネコがいるそうだ。島内外からのビジターにヤマネコを見てもらうことでヤマネコを身近に感じ、それらを取り巻く問題に関心を持ってもらうのがねらいである。同センター訪問前夜に3時間ほどヤマネコのナイトセンサスを行ったが、一頭も見られなかったのが、実物を見ると嬉しかった。イエネコと比べると大きさは変わらないが、しっぽは太く長く、独特な柄の毛並みをしていて愛らしい顔立ちであった。現在、ツシマヤマネコはほとんどが上島に生息しており、最新の調査では生息数はおおよそ70または100頭といわれている。主な減少要因は、イノシシやシカによる生態系のかく乱、里地里山機能の低下による好適生息環境の減少、交通事故等が挙げられる。

ヤマネコの展示個体見学後、同センターを管理する環境省対馬自然保護官事務所の山本以智人レンジャー（上席自然保護官）のお話を聞いた。レンジャーとは国立公園の管理や希少野生生物の保護事業などを現場で担う環境省の職員だ。実際には95%はデスクワークで、法的手続きの許認可事務、関係機関との連絡調整、スタッフのマネジメント等が多いという。山本レンジャーは平成30年度から対馬に派遣され、対馬の前は沖縄のやんばるで活動されていたそうだ。

山本レンジャーより、まず、対馬には日本系の生き物と大陸系の生き物が混在していることを聞いた。対馬は大陸に近く、かつて大陸とつながっていた頃に生き物が渡ってきた。例えばツシマテンは日本系の動物だが、ツシマヤマネコやチョウセンイタチは大陸系である。これら3種の食肉目が生息しているということは、対馬の生態系の豊かさを示している。また、日本の鳥類は約600種確認されているが、対馬は大陸や日本、東南アジアの渡り鳥の中継地であり、400種近

くもの野鳥が確認されているそうだ。もともと、対馬の潜在自然植生は常緑広葉樹で、薪炭やしいたけ生産のために落葉樹林化されたが、戦後の拡大造林政策によって、山の斜面の畑を含め、スギやヒノキの植林が広範囲で行われた。木材価格の低迷、林家の高齢化や担い手不足などにより人工林の管理は十分に行われず、林床は暗く、下層植生が育ちにくくなってしまい、ネズミや昆虫類などの小動物が減っているという。そうなるそれらを食べて生きているヤマネコなどの餌が減り、生息に影響を及ぼす。また、ハンターの高齢化や里地里山環境のバランスの変化等によってツシマジカが急増し、農林業や野生生物保護にも影響を与えている。そのため、シカの数に適正管理することが必要だという。

さらに、対馬では朝鮮半島から渡ってきたとされる特定外来生物「ツマアカスズメバチ」も大きな問題となっている。本土でも北九州や宮崎では確認されているというが、対馬で抑えて本土に本格侵入させないために、5年前から対策がなされているそうだ。巣の駆除や女王蜂の捕獲、化学物質を用いた繁殖抑制の研究等に取り組んでいるが、ツマアカスズメバチの繁殖能力が高く、高所に営巣するため、駆除が追いついていないのが実態である。対馬の豊かな生態系は想像以上に危機にさらされていることを知った。

ツシマウラボシシジミは、シカによる食草の被害によって、最後は野生下で6匹程度にまで減少したということ保護区での活動を通じて学んだが、動物園、大学研究機関、環境省、対馬市、地域団体等が連携し、飼育下で繁殖させた個体を野生復帰させる試みが進められている。地元の方も協力して、継続的に活動することで成果が出つつある。もっとこのような取り組みを普及啓発させ、今の状況に危機感を持ち、課題を解決しようという活動の環を拡げることが重要だと考える。ツシマウラボシシジミの保護活動をモデルに、他の野生動植物の保護活動に広がっていけば対馬の環境は良い方向に進むのではないだろうか。

3. まとめ

アクションリサーチの2日目は自然体験や生き物と関わる活動が多い1日であった。また高校生やもやいの会の方々との交流は、共同作業を通じた気付きや疑問から質問をしたり、私たちが体感したりと良いリサーチの場になった。ツシマウラボシシジミの保護やビオトープでの活動は、高校生にとっても、普段、高校と自宅の行き来のみで、自然との関わりや地域との関わりが少なくなっている分、貴重な体験になったようである。また、高校生活は先生と生徒、生徒同士の関係性が中心となるため、様々な世代の人、そして私たちのように普段島にいない若い大学生との交流も良い経験となっているだろう。

こうした活動をどう対馬全体に広げ、多くの人に理解してもらうか、つまり社会化するための仕組みづくりが大きな課題である。そこで、私たち学生5人が東京にいながらも対馬に貢献しようと、対馬高校ユネスコスクール部の生徒たちとともに協働企画を立てることになった。まだ構想段階であるが、クラウドファンディングで資金を調達し、ツシマウラボシシジミのピンバッジを作成するという案が出ている。こうして私たちにも手伝えることは積極的に参加していければよいと思った。

対馬の自然や環境のことはもちろん、それらを通して様々なことを学べたので、私にとって収穫の多い1日となった。こうした課題を抱えているのは対馬だけではなく、里地里山としての自然を有する日本の様々な過疎地域が直面しているのであろう。対馬での体験を通じ、人間

の関与なしに生存できない生物がいる一方で、この状況を作ってしまったのは他の何でもない人間であるという事実を実感した。なってしまったことはどうしようもないが、この状況を打開するための策はとらなくてはならない。対馬は都会に比べて自然と密接に関わって生活しているからというのはあると思うが、人々の意識も高く、環境保全への取り組みも進んでいると感じた。人と自然の共生は、これからの社会にとってとても大切な視点である。東京一極集中と極度な過疎化が進み、地域創生が叫ばれる今日、私たちのようにすぐ身近に自然環境について考えるきっかけのない生活をしている人々に現在の問題をどのように理解してもらい、意識を変えてもらうかが共生社会の実現にあたっては大きなポイントではないだろうか。

(こもだ・かおり 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)